

先週私たちは、ピシデヤのアンテオケにあるユダヤ人の会堂で、パウロの語ったメッセージについて見ました。その内容は、主イエスこそ、神様がユダヤ人の父祖たち、またダビデ王に約束された子孫、つまり、神の王国を建て、これを永遠に堅く治められる救い主である、というものでした。彼らの子孫であるエルサレムに住むユダヤ人とその指導者たちは、預言者たちのことばを理解せず、その約束された方を罪に定めて殺してしまいます。でも、それさえもご存知であった神様は、主のよみがえりを預言され、それを実現されたのです。

私たち異邦人にとっては、このことは、一度聞いただけでは、とうてい理解のできないものだと思います。けれども、この時の聴衆は「ユダヤ人と神を恐れかしこむ異邦人」、つまり、聖書に通じていた人々でしたから、パウロは、旧約のことばを引用し、彼らにその歴史において実際に起こったバビロン捕囚を想起させることで、救い主イエスを信じないのではなく、信じて、罪赦され、神に義と認めらるようにと勧めるのです。今日は、その続きですが、そのパウロのメッセージに対する人々の応答と、その後の出来事が記されています。

42-44 節「ふたりが会堂を出るとき、人々は、次の安息日にも同じことについて話してくれるように頼んだ。43 会堂の集会が終わってからも、多くのユダヤ人と神を敬う改宗者たちが、パウロとバルナバについて来たので、ふたりは彼らと話し合っ、いつまでも神の恵みにとどまっているように勧めた。44 次の安息日には、ほとんど町中の人々が、神のことばを聞きに集まって来た」。

パウロの話聞いた人々は、次の安息日にも同じことを話してくれるように頼みました。つまり、彼らは、パウロを通して語られた神様のことばに心惹かれたのです。そのため、会堂の集会が終わってからも、多くのユダヤ人と神を敬う改宗者たちが、パウロたちについて来ました。その彼らと話し合ったパウロとバルナバは、「いつまでも神の恵みにとどまっているように」と彼らに勧めるのです。そういうことがあって、次の安息日には、ほとんど町中の人々が、神のことばを聞きに集まって来ました。

この町が、どれほど大きかったかはわかりません。でも、「ほとんど町中の人」というのですから、会堂に入りきれなかったことが想像されます。そして何よりも、その多くは異邦人であったと思われます。その大ぜいの人々が、みな神のことばを聞きに集まって来たというのですから、本当は喜ぶべき状況ではないでしょうか？ところが、そこで問題が生じます。45 節「しかし、この群衆を見たユダヤ人たちは、ねたみに燃え、パウロの話に反対して、口ぎたなくののしった」。多くの異邦人たちを含む町の人々が、パウロたちの話を聞こうと集まって来たのを見たユダヤ人たちは、ねたみに燃え、パウロの話に反対して、口ぎたなくののしります。

ここに「パウロの話に反対して」とありますから、この時もパウロは、奨励のことばを語っていたのでしょう。そして、人々の関心は、いよいよパウロの話す「約束の救い主イエス」へと向けられたのだと思います。もしそこでユダヤ人たちが、主の復活について聖書から論じていたなら、また状況は違っていたかも知れません。でも、彼らは「ねたみ」という感情に支配されることで、話し合いではなく、パウロを口ぎたなくののしるのです。その応答は、実に幼稚に思えますが、人が感情にコントロールされる時、幼稚な態度を取るということは、私たち自身もよく知っていることではないでしょうか？気をつけなくてははいけません。

その彼らに対するパウロたちの応答が、46-47 節。「そこでパウロとバルナバは、はっきりとこう宣言した。『神のことばは、まずあなたがたに語られなければならなかったのです。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者と決めたのです。見なさい。私たちは、これからは異邦人のほうへ向かいます。47 なぜなら、主は私たちに、こう命じておられるからです。『わたしはあなたを立てて、異邦人の光とした。あなたが地の果てまでも救いをもたらすためである。』」

ここでパウロは、自分が異邦人宣教のために立てられた者であると理解しつつも、神の選びの民であるユダヤ人たちに、まず主の福音が届けられることの重要性を語っています。ですから、この後、別の町に行った時も、ユダヤ人の会堂に入って、みことばを語るのです。ところが、このユダヤ人たちは、それを拒んだ。そこでパウロは、イザヤ書 49:6 を引用して、これからは異邦人のほうへ向かうと宣言したのです。

では、このパウロのことばを聞いた異邦人たちは、それにどう応答しましたか？48節「異邦人たちは、それを聞いて喜び、主のみことばを賛美した。そして、永遠のいのちに定められていた人たちは、みな、信仰に入った」。ここには、パウロの話すことばに反対したユダヤ人たちは、「自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者と決めた」とあり、パウロのことばを聞いて喜び、信仰に入った人たちは、「永遠のいのちに定められていた人たち」とあります。皆さん、「永遠のいのちにふさわしくない人」とはどんな人ですか？また、「永遠のいのちに定められている人」とはどんな人でしょうか？

パウロは、自分の話すことに反対した人たちに対して、「あなたがたは、永遠のいのちに定められていないので、救われない」とは言っていません。むしろ、「神のことばは、まずあなたがたに語られなければならなかったのです」と、彼らが神の選びの民であるゆえに、彼らこそ、まず約束の子孫、救い主イエスの到来の知らせを聞くべきだと言うのです。つまり、そこにはユダヤ人たちの救いが前提とされています。ところが、彼らは、その救いのことば、良い知らせである主イエスを拒んだのです。そのように、彼らは自分自身で、永遠のいのちにふさわしくない者と決めてしまった、とパウロは言います。

この点で私たちは、誤解のないようにしたいと思います。つまり、主イエスは、すべての造られた人に福音が届けられることを御心としておられますが、それを聞いて、誰が信じて主の弟子となるかは、私たちにはわからないのです。信じたようでも、後に信仰を捨てる人もいます。ですから、主のことばを語るのに、その相手が永遠のいのちに定められているかどうかと議論することは意味がないのです。ただみことばを聞き、主を信じる人には、それが主の選び（恵み）によるのであって、主はご自分に信頼する者を、最後まで導いて下さると教える必要はあります。

ですから、パウロの言うように、この時、主を信じた人は、みな「永遠のいのちに定められていた人」です。そして、主を拒んだ人たちは、自分で自分を永遠のいのちにふさわしくない者と決めたのです。そのどちらにしても、彼ら自身がその「始まり」ではありません。まずみことばが語られ、聞かされることがあって、それに対する応答として、ある人々は拒み、ある人々は受け入れたのです。ですから、そこでの違いは、主のことばに対する応答であって、「救われたいのに、選ばれてないから信じれない」とか、「救われたくないのに、選ばれているから信じる」ということはありません。

続きを見ます。49-51節「こうして、主のみことばは、この地方全体に広まった。50ところが、ユダヤ人たちは、神を敬う貴婦人たちや町の有力者たちを扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、ふたりをその地方から追い出した。51ふたりは、彼らに対して足のちりを払い落として、イコニオムへ行った」

ここには、主のみことばが、この地方全体に広まった理由が、「信仰に入った人々によって」とは記されていません。でも普通に考えて、それは彼らがみことばを語ったからです。ただ、ここでの救いの出来事を良く思わないユダヤ人たちは、神を敬う貴婦人たちや町の有力者たちを扇動し、パウロとバルナバを迫害させることで、その地方から彼らを追い出します。ですから、この時、信じた人たちは、みことばを教え、導いてくれる人たちを失ったのです。でも、52節「弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた」。つまり、主ご自身が彼らとともにおられ、彼らを喜びと聖霊で満たされたので、彼らは主のみことばを証しました。

今日の箇所は、ここで終わりですが、私たちは、ここからどんなことを学ぶことができるでしょうか？ここにはパウロとバルナバを通して語られた主のことばに対する人々の応答が記されていますが、皆さん、あなたはご自分をどちらの側に置きますか？ご自分をパウロの話に反対して、口ぎたなくののした人たちと同じ側に置く人はいますか？そのようにして、自分で自分を永遠のいのちにふさわしくない者とする人はいますか？

そんな人は、最初から教会の礼拝に出席しようとする考えないと思いますが…。でも、どうでしょうか？もしそっちではないなら、あなたは、もう一方の側の人ですか？パウロの話すことばを聞いて喜び、信仰に入った人々、つまり、永遠のいのちに定められていた人々の側に、あなたはご自分を置かれますか？私自身は、自分がそっちであることを願いますし、また、皆さんもそうであることを願うわけです。

でも、気をつけなくてはいけないのは、神様によって与えられるこの救いは、消去法に基づくものではないということです。つまり、私たちが、自分自身をパウロに反対したユダヤ人たちとは違う、と考えたからといって、それで自動的にもう一方の信仰に入った人たちの側になるというわけではありません。もちろん、ここにおられる皆さんは、主イエスが救い主であるということに反対したり、そのことを語る私を口ぎたなくののしることはされないでしょう。では、それがあなたをして、喜びと聖霊で満たされている証拠といえますか？反対しないということは、賛成なのでしょうか？

信仰の世界には、中間はないと言いたいところですが、聖書では、「生ぬるい信仰」について特に黙示録に記されています。でも、ここで「永遠のいのちに定められたいた人々」は、「異邦人も救われる」ということを聞いて喜び、主のみことばを賛美した、みことばの栄光を彼らはほめたたえたのです。それがあって彼らは信仰に入った、ということができると思います。また主を信じた彼らは、自分たちを信仰に導いてくれたパウロとバルナバが、反対者たちに、しかも、上流階級といった力のある人々によって迫害され、その地方から追い出されるのですが、喜びと聖霊で満たされていました。それがあって彼らは主のみことばを人々にも語る事ができたと思うのです。

そうであるなら、どうですか？もしあなたが、自分で自分を永遠のいのちにふさわしくない者と決める人ではなく、自分は永遠のいのちに定められていると考えるなら、あなたには、主のみことばを聞くために集まり、それを聞いて喜び、そのすばらしさをほめたたえるという心（の態度）がありますか？主を信じ、喜びと聖霊に満たされることで、主のみことばを他者にも証しておられるでしょうか？ここで語られていること、それはユダヤ人は主に反対し、異邦人は主を信じて救われる、ということではありません。何人であろうと、罪人を救うためにこの世に来られ、十字架の死と復活をもって罪の赦しと永遠のいのちを与えて下さる主イエスを拒む人は、永遠のいのちを受けられず、彼を信じる者は永遠のいのちを受けます。

なぜなら、この救いは、私たち罪人の側の正さとか行いといった何か、にではなく、全く正しい方である主イエスと主がああ十字架において成し遂げられた贖いのみわざとにかかっているからです。つまり、生まれながらに自己中心で、滅びに至るばかりの私たちを、神様が救うことを望んで下さったから、そのために御子イエスを救い主として遣わして下さったから、私たちは彼を信じることで、罪赦され、神に義と認められる、という主の救いに預かることができます。神様がそれを恵み（ギフト）として与えて下さるからです。

永遠のいのちに定められている人は、救いのことば、良い知らせを聞いて喜び、主のみことばを賛美する、と今日の箇所は語っています。それだけでなく、そのようにして主を信じるなら、その人は喜びと聖霊で満たされるのです。そして、その喜びと聖霊の満たしがあるからこそ、永遠のいのちをもつ者は、主と主のことばを証せずにはおられなくなる。主イエスが、その喜びの理由であり、聖霊を通してご自身の栄光（すばらしさ）をわからせて下さるからです。今日も主は、あなたをご自分の許に招いておられます。あなたは、その主の招きにどう応答されますか？みことばをほめたたえ、主を信じようではないですか。そして、主によって喜びと聖霊に満たされることで、主と主のみことばを宣べ伝えようではありませんか。